

くるまづか
車塚遺跡

所在地 岡崎市岩津町車塚地内
(北緯35度0分46秒 東経137度10分23秒)

調査理由 道路改良工事(主) 岡崎足助線

調査期間 平成21年10月～平成22年3月

調査面積 4,430㎡

担当者 鈴木正貴・川添和暁



調査地点 (1/2.5万「豊田南部」)

調査の経過 調査は、県道岡崎足助線道路改築工事に伴う事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受けて実施した。

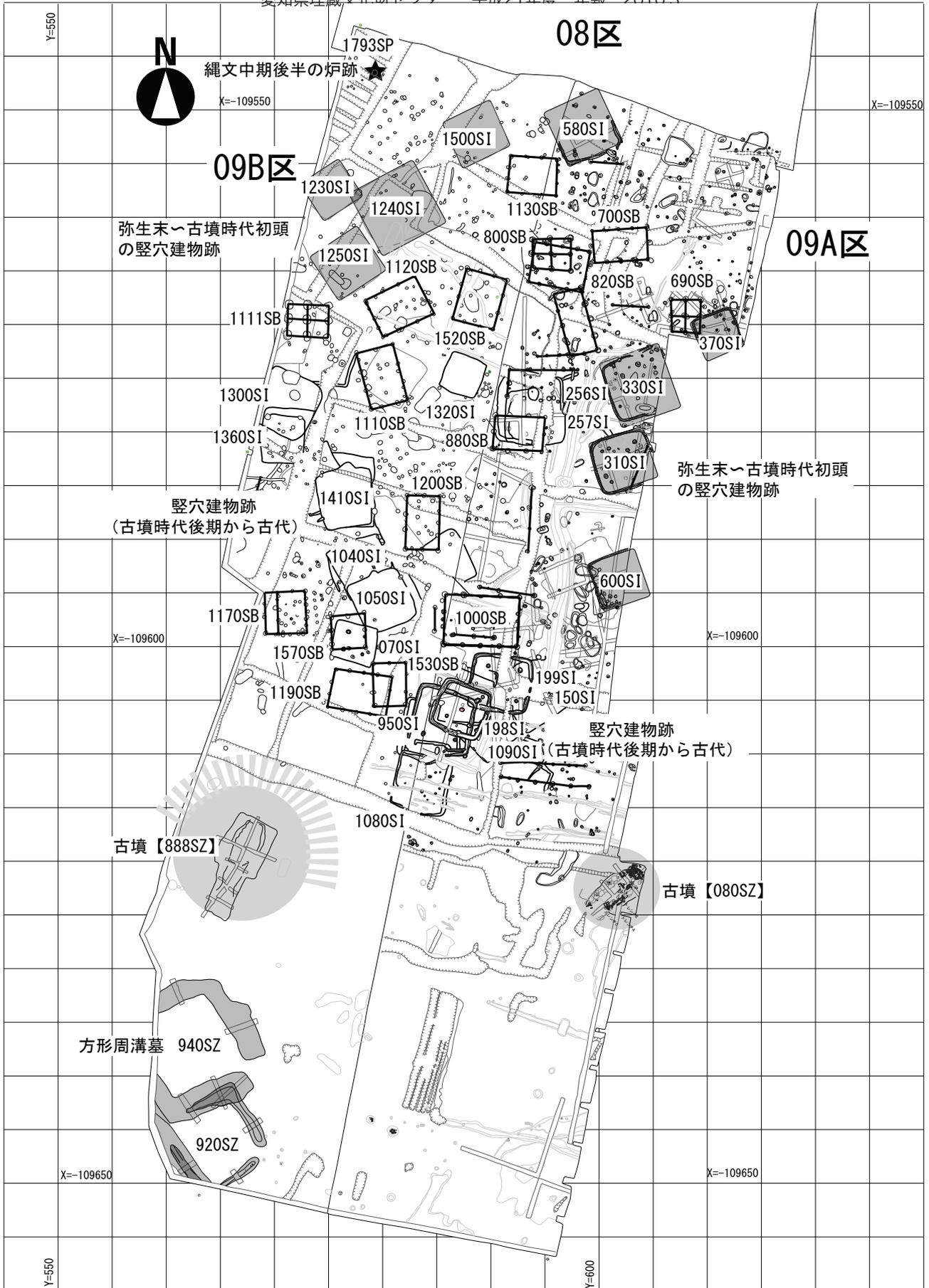
立地と環境 車塚遺跡は、矢作川東側の天神山から伸びる丘陵末端が、さらに西から南方向へと展開する舌状の台地上に立地する。台地上の標高は40～50mを測る。台地西側には矢作川に流れる於御所川が巡り、川を挟んで西側には、於御所遺跡・東郷遺跡が存在する。この丘陵から台地にかけては、車塚第1号墳～3号墳の存在が知られており、さらに岩津天満宮周辺の丘陵上には岩津第1号墳～6号墳と天神山第1号墳～9号墳が、さらに沢を挟んで北東側には八ツ木古墳が存在するなど、周囲は6世紀から7世紀代の古墳が群をなして確認されている区域である。

調査の概要 今年度の調査区は、08区に南接した区域であり、東側から伸びる丘陵端部の台地上に位置する。調査対象区を南北方向に2分して、東側をA区・西側をB区と呼称し、A区・B区の順に調査を行なった。調査の結果、縄文時代・弥生時代末～古墳時代初頭・古墳後期～古代の遺構・遺物が確認できた。

縄文時代 縄文時代中期後半の土器片を包含する炉跡(1793SP)が1基検出できた。検出時で径30cm程度の円形を呈する。B区北端に位置しており、付近では昨年度の調査で炉跡が1基調査されている(08区535SK)。その他、09A・09B区では、石鏃・石匙・剥片・打欠石錘など石器が散発的に出土しており、遺構の形成は認められないものの活動エリアであったことが示唆される。

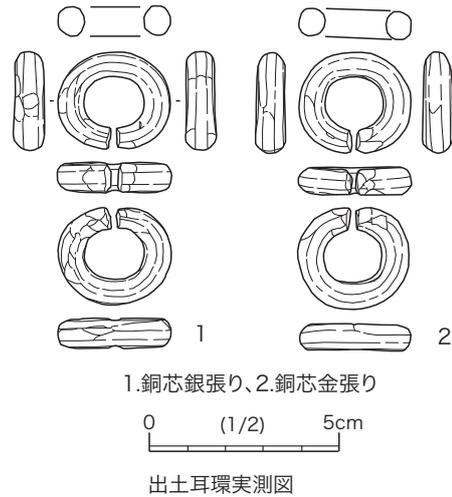
弥生時代末
古墳時代初頭 遺構としては、竪穴建物跡と方形周溝墓が調査された。竪穴建物跡は少なくとも9棟検出できた。調査区北半分の台地平坦部に立地しており、いずれも約20度西に振れた状態で軸線が認められるようである。平面形態は、大きいもので一辺6mほど、小さいもので一辺4mの方形プランを呈し、いずれも壁溝が認められ、検出レベルから掘り方で深さ20m以上を測るものもある。床面には、炉跡とした被熱部分が中央付近に広がって検出されているものもある。出土遺物は、散発的ではあるが、竪穴建物跡ピット内(330SIの887SP)で台付甕脚部を、建物跡埋土で高杯をまとめて確認した事例もある(600SI)。方形周溝墓は現状で2基検出できた(920SZ・940SZ)。09B区南端の傾斜地に存在しており、溝で区切られた空間は一辺が10mを測る。溝は検出時で幅2m程度を測るもので、いずれも南東角部分で途切れており、ここが陸橋部であったと考えられる。方形周溝墓の溝には再掘削を行なった痕跡が確認でき、溝の重複関係から940SZの後920SZが造られたことが明らかとなった。溝の中からは、局所的に壺などがまとまって出土する区域が認められた。

古墳と横穴式石室 調査区南側の区域で、古墳が09A区で1基(080SZ)、09B区で1基(888SZ)の計2基が検出できた。080SZは墳丘部分が径7m程度の円墳になると考えられる。石室は長さ6m・



車塚遺跡遺構全体図 (1:500)

幅2.5mを測り、平面形状は側壁が直線的になる。最も良好に残存しているのは奥壁部分であり、床の敷石も確認できた。側壁は基底部分のみが残存しており、一部後世の抜き取り痕が確認できた。側壁に使用された礫には工具痕が明瞭に残されているものもあった。出土遺物には、台付壺などの須恵器・鉄器がある。888SZは墳丘部分が径13m、北側を中心に墳丘外には周溝と考えられる最大幅4mを測る浅い溝が認められる。石室は、全長9m・最大幅3mを測り、玄室・羨道・前庭部分が確認できた。888SZは後世の攪乱が著しく、奥壁・側壁・床石などが激しく抜き取られており、羨道部から前庭部にかけて、側壁の石積みがごくわずかに確認できた程度である。抜き取り痕が確認できたために、玄室部分は胴張りになると推定できた。出土遺物には、坏身・高坏などの須恵器、耳環(金環1・銀環1)、鉄器がある。



古墳時代後期
古 代

この時期からそれ以降と考えられる竪穴建物跡も確認できている。調査区全体の中央付近に10棟程度の重複が著しい形で確認できた(198SI・950SIなど)。カマドと考えられる焼土塊が掘り方端の北側に確認できている。また、09A区東端などの区域では、遺物の廃棄による土坑群が集中して認められた。

昨年度の調査でも多数のピットが確認できているが、これらピットが掘立柱建物跡など古代のものと推定できたのは、今年度の成果である。今回、ピット群から掘立柱建物跡16棟や柵列が確認できた。掘立柱建物跡は現在の方位に近いラインを軸線としており、16棟のうち3棟(690SB・810SB・1111SB)は総柱型建物跡である。

総 括

今年度の成果としては、弥生末から古墳時代初頭と古墳時代後期から古代の集落跡の様相が明らかになったことで、台地の平坦部と南側の緩斜面では、土地利用の様相が異なることが判明した。弥生時代から古墳時代初頭では、台地の平坦部に居住域、南側の緩傾斜面に墓域が形成されている。一方、古代の集落跡は台地の平坦部に集中して築かれており、南側の緩斜面には集落はつくられなかったようである。また、南側の緩斜面頂部に新規の古墳2基が確認できたことも大きな成果である。

(川添和暁)



A区古墳080SZ石室 (南から)



B区古墳888SZ石室 (南から)



A区古墳080SZ須恵器出土状況 (北西から)



B区古墳888SZ耳環出土状況



A区弥生末～古墳時代初頭の竪穴建物跡310SI (北西から)



B区方形周溝墓920SZ・940SZ(北から)



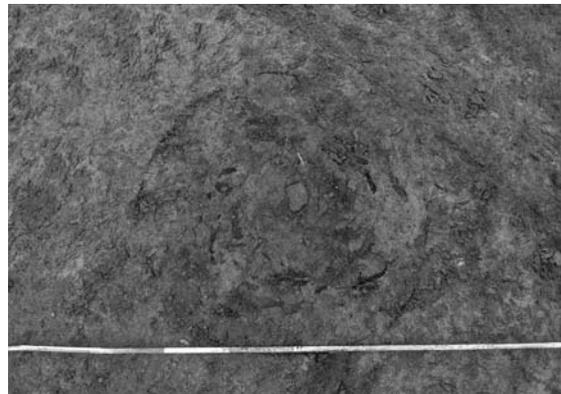
A区掘立柱建物跡810SBほか(西から)



A区掘立柱建物跡ピット507SP須恵器出土状況(西から)



A区古代竪穴建物跡198SIほか(西から)



B区縄文時代炉跡検出状況1793SP